

心理臨床センター

1 大学の理念・目的および学部等の使命・目的・教育目標

(理念・目的等)

心理臨床センターは、臨床心理学的諸問題にかかわる相談・援助活動及び調査研究を行うことにより、社会貢献を図るとともに、大学院文学研究科臨床人間学専攻臨床心理学専修の大学院生の臨床心理実習機関として臨床心理士養成のための実地訓練を行うことを通じて、本大学の教育・研究に貢献することを目的とする。

★現状(評価)

・現状

心理臨床センターは、相談者数が毎年増加を続け、2006年度には年間約1800回の相談を行い、地域に開かれた相談機関として社会貢献を果たしてきた。また、実習機関としては、2005年度に開設された文学研究科臨床人間学専攻臨床心理学専修が2006年度には修士課程2学年が揃い、計20名の大学院生が研修相談員としてセンターの活動に参加し、臨床心理士養成のための重要な臨床心理実習の場として教育に貢献している。

・長所

広く地域を対象として相談活動を行うことにより、大学のもつ臨床心理学的知見を生かした社会貢献を図ることができている。また、大学内に臨床心理実習の場を持つことにより、大学院生を対象として生の体験に根ざした教育・指導ができています。

・問題点

現在、来談者数は最終的に目標とする数の約70%に達しているが、今後大学院生の臨床心理実習を有効に行うためには、さらに来談者が増えることが必要である。これまで、増加する相談件数に対しては、2005年度には専任の相談員1名、2006年度には特別嘱託の相談員の時間数が週4時間増えることによって対応してきたが、さらなる来談者の増加に応えるには相談スタッフの増員が必要である。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

今後、学内での理解を得て、理事会に積極的に働きかけて、センターの相談スタッフの増員を実現する。

(理念・目的等の検証)

C群・大学・学部等の理念・目的・教育目標を検証する仕組みの導入状況

C群・大学・学部等の理念・目的・教育目標の、社会との関わりの中での見直しの状況

★現状(評価)

・現状

心理臨床センターでは、学内委員による運営委員会を組織し、相談活動や実習の現状を踏まえながら、理念・目的等の検証が行われている。2004～2005年度は、委員の大部分が臨床心理学の非専門家であるため、センターの相談活動の実態に即した認識を持つのに時間がかかるという問題が生じた。しかし、2006年度には、多くの委員が2004年度から継続したことや、運営委員会での活発なディスカッションおよびセンターの相談活動に関する諸資料の提示によって、上記の問題は大幅に改善された。2007年度も多くの委員が継続しており、センターの相談活動に対する十分な認識を持った委員による検証が今後行われる体制が整いつつある。

・長所

臨床心理学にかかわる教員や相談員だけでなく、他学部教員などの多角的な見地からの意見を得て検討を行うことで、より客観的、多角的な検証が行われている。

・問題点

運営委員会委員の大部分が臨床心理学の非専門家であるため、センターの相談活動の実際を理解しにくいという問題は、今後も起こりうる。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

運営委員会でのディスカッションおよびセンターの相談活動に関する諸資料の提示によって、センターの相談活動

に関する十分な理解が得られることを努力する。また、運営委員に対してだけでなく、全学的にセンターの活動に関する適切な理解・認識を持ってもらうべく、学内広報誌などを活用して働きかける。

(健全性, モラル等)

C群・大学としての健全性・誠実性, 教職員及び学生のモラルなどを確保するための綱領等の策定状況

★現状(評価)

・現状

心理臨床センターは、外部からの相談者に対して相談・援助を行う機関であり、相談者に対しての倫理を厳守した姿勢が求められ、また同時に個人情報の取り扱いについての細心の注意が必要とされる。またこれは、実習を行う大学院生にも教育していく必要がある。そこで、個人情報の管理方法についての規程を定め、全員に周知徹底している。また、倫理や個人情報保護法について、相談に関わる教員、相談員、大学院生に対して研修会を行っている。

・長所

規程に基づいて管理を徹底したり、研修会を行ったりすることはモラルを高めるだけでなく、大学院生の教育にも役立っている。

・問題点

相談者に対してのモラルが守られるよう、今後も点検を行っていく必要がある。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

内部点検の視点やシステムの作成を行う。

1 大学の理念・目的および学部等の使命・目的・教育目標に基づいた特色ある取組み

(大学・学部における特色ある取組)

★現状(評価)

・現状

相談者の数は年々増加し、外部の専門機関だけでなく広く一般にも心理臨床センターの存在が周知されてきている。また、2004年度から小～高校の教員対象のグループ、2006年度からはサイコドラマスクールなど外部の専門家に対して研修を行う取組みも行っている。

・長所

これらは、本学における臨床心理学分野の活動を広く普及していくと同時に社会貢献に資する取組みである。

・問題点

相談者数の増加に対応する人員の確保が求められる。また、専門家対象のグループは開催時間が夜間になるため、それに対応する相談員、事務員の確保が求められる。

★改善方策

問題点に対する改善方策

今後、学内での理解を得て、理事会に積極的に働きかけて、センターの相談スタッフの増員、夜間の事業への対応などを実現する。

2 教育研究組織

★目的・目標

(教育研究組織)

A群・当該大学の学部・学科・大学院研究科・研究所などの組織の教育研究組織としての適切性, 妥当性

★現状(評価)

・現状

現在のセンターの組織は, 心理相談・治療活動に専心するようになり立っており, そのような臨床活動を通じて大学院生の教育・訓練も行なってきた。一方, 研究活動については, 臨床活動と直接結びついた事例研究の形では活発に行なわれているが, それ以外の研究には組織の形態として十分に対応できていない。

・長所

臨床活動を踏まえた教育・訓練, 研究の場として適切性, 妥当性を備えている。

・問題点

センターの直接の臨床活動の範囲を超えた研究活動については, 組織としての対応は十分でない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

センターの組織は臨床活動とそれに基づく教育・研究を行うことを第一の目的としているが, 今後, より広い意味での研究活動を行なう体制作りを行い, 実績を積むことを目指す。

6 研究活動と研究環境

★目的・目標

相談・援助活動を通して見出された臨床心理学的課題についての事例研究, 及び調査研究を行うことにより, 臨床心理学的知見を高め, それを社会貢献に資することを目的とする。

(1) 研究活動

(研究活動)

A群・論文等研究成果の発表状況

C群・国内外の学会での活動状況

C群・当該学部として特筆すべき研究分野での研究活動状況

C群・研究助成を得て行われる研究プログラムの展開状況

★現状(評価)

A群・論文等研究成果の発表状況

・現状

紀要「明治大学心理臨床学研究」の第2号を発行し, 相談事例に見る現代の臨床心理学的な課題について詳細な検討を発表することができた。また, 2005年度の相談事例についての資料を掲載した。

・長所

第1号に続き, 第2号でも心理臨床センターにおける相談のあり方や姿勢を示すことができ, それを関係諸機関にも示すことができた。

・問題点

大学院生の実習機関でもあり, 今後は大学院生の教育を目的として論文も掲載していく必要がある。

C群・国内外の学会での活動状況

・現状

センターの活動は, 何よりも実践的な相談活動を中心とするため, その活動が十分に蓄積されることによってはじめて研究活動に繋げていくことが可能となる。しかるに, センターの活動が開始されてまだ間がないため, センターの活

動に基づく学会での活動状況は特に生じていない。今後、活動実績が蓄積するのに伴い、センターの相談事例を学会で発表するなどの展開が期待される。

・長所

相談活動の実績が蓄積した段階では、臨床心理学的に非常に充実した研究活動としても展開できる可能性が大きい。

・問題点

学会での活動に繋げるには、時期尚早であるが、今後その方向で努力する必要がある。

★改善方策

A群・論文等研究成果の発表状況

2007年度に向け、大学院生の論文掲載の準備、指導を行う。

C群・国内外の学会での活動状況

相談活動の実績をしっかりと蓄積し、センターの事例検討会などを中心に絶えずその分析を心がけて、学会活動にも繋げる準備を行う。

(研究における国際連携)

C群・国際的な共同研究への参加状況

C群・海外研究拠点の設置状況

★現状(評価)

・現状

現段階は、相談活動実績の蓄積段階にあり、まだ国際的な研究に向けての準備ができる段階ではない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

相談活動の実績をしっかりと蓄積し、今後国内の学会を足がかりに、次の段階として国際的な活動に向けて準備を行う。

(2) 研究環境

(経常的な研究条件の整備)

A群・個人研究費、研究旅費の額の適切性

A群・教員個室等の教員研究室の整備状況

A群・教員の研究時間を確保させる方途の適切性

A群・研究活動に必要な研修機会確保のための方策の適切性

B群・共同研究費の制度化の状況とその運用の適切性

★現状(評価)

A群・研究活動に必要な研修機会確保のための方策の適切性

・現状

心理臨床センターを訪れる相談者の様態は様々であり、それに対応していくのには、常に事例研究や新しい療法の研究・研修などを行っていく必要がある。そのためには、内部のスタッフだけでなく、外部から専門的な知見をもつ専門家を招いての事例研究や研修などをしていくことが必要と思われる。しかし、2006年度はそのための予算が確保できておらず、スタッフから会費を集めて事例研究会を実施した。

・問題点

研究・研修のための予算を確保していく必要がある。

<p>★改善方策</p> <p>・問題点に対する改善方策 大学に対して、研究・研修の機会の必要性について、他大の研修についての資料を集めるなどして具体的説明をし、予算の確保をする。</p>
<p>(競争的な研究環境創出のための措置)</p> <p>C群・科学研究費補助金及び研究助成財団などへの研究助成金の申請とその採択の状況 C群・学内的に確立されているデュアルサポートシステム(基般(経常)的研究資金と競争的研究資金で構成される研究費のシステム)の運用の適切性 C群・流動研究部門、流動的研究施設の設置・運用の状況 C群・いわゆる「大部門化」等、研究組織を弾力化するための措置の適切性</p>
<p>★現状(評価)</p> <p>C群・科学研究費補助金及び研究助成財団などへの研究助成金の申請とその採択の状況 ・現状 現段階は、研究活動に繋げていくために、相談活動の蓄積をしている段階である。今後、蓄積された活動実績を基に、科学研究費補助金などを申請し、さらに対象を広げた研究をしていくことが期待される。</p>
<p>★改善方策</p> <p>・問題点に対する改善方策 研究を目指して、相談活動を蓄積するとともに、現在の組織体制で可能な範囲で、科学研究費補助金などを申請して、より広く研究活動を行なっていくことを計画する。</p>

7 施設・設備等

<p>★目的・目標</p> <p>相談活動の充実のため、来談者が落ち着いた気持ちで、また精神的に守られた状態で相談を受けられる環境を整備する。また、箱庭療法、遊戯療法を実施するのに必要な用具、心理査定で用いる心理検査用具の充実を図る。</p>
<p>(施設・設備等の整備)</p> <p>A群・大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性 B群・教育の用に供する情報処理機器などの配備状況 C群・社会へ開放される施設・設備の整備状況 C群・記念施設・保存建物の保存・活用の状況</p>
<p>★現状(評価)</p> <p>A群・大学・学部等の教育研究目的を実現するための施設・設備等諸条件の整備状況の適切性 ・現状 相談を行うための面接室3、子どもに対する遊戯療法を行うための遊戯療法室2の施設、およびそれぞれの面接室、遊戯療法室で使用する箱庭療法用具、遊具・玩具等が整備されている。また、心理検査の用具も整っており、来談者の状態に応じたさまざまな対応をすることができる体制を備えている。</p> <p>・長所 現状の面接室、遊戯療法室は、相談を行うための環境として非常に優れており、また箱庭療法用具、遊戯療法用の遊具・玩具も充実している。</p> <p>・問題点 相談者数の増加に伴い、面接室が不足する事態が発生する場合もあり、今後に向けて検討が必要である。2006年度は、研修相談員(文学研究科臨床人間学専攻臨床心理学専修の大学院生)が2学年揃い、20人が臨床心理実習を受けたため、時間帯によっては面接室が不足する事態が起きた。また、現在の面接室・遊戯療法室は個人面接を前提に整えられているが、すでに3つのグループ療法をセンターの相談活動の一環として開始しており、センターの施設</p>

では対応できず、会議室を借用している状況にある。さらに、研修相談員を対象とする指導・研修を行うための研修室がないため、スタッフルームを定員3倍の状態でも研修室に代えて使用している状態であり、さまざまな支障が出ている。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

面接室・遊戯療法室の数は当面改善が難しいが、検討は続けていく必要がある。グループを対象とした相談活動と研修相談員に対する指導・研修を行うための兼用の部屋をセンター専用の部屋として設置することを計画する。

(利用上の配慮)

A群・施設・設備面における障害者への配慮の状況

C群・各施設の利用時間に対する配慮の状況

C群・キャンパス間の移動を円滑にするための交通動線・交通手段の整備状況

★現状(評価)

A群・施設・設備面における障害者への配慮の状況

・現状

相談を行うための面接室3、子どもに対する遊戯療法を行うための遊戯療法室2はバリアフリーであり、車いすでも利用できようになっている。

・問題点

現段階では利用に当たっての問題は生じていない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

(組織・管理体制)

B群・施設・設備等を維持・管理するための責任体制の確立状況

B群・施設・設備の衛生・安全を確保するためのシステムの整備状況

★現状(評価)

B群・施設・設備の衛生・安全を確保するためのシステムの整備状況

・現状

心理臨床センター内は、相談室内と廊下の温度差が大きいことや、相談室の窓が大きいために外気の影響を受け易いことがあるが、アカデミーコモンの空調は一斉管理であるため状況にあった温度調節が難しい。

・問題点

適切な温度調節ができないことにより、来談者(特に幼児や小学生など)の体調の変化や、相談に集中できないことなどが懸念される。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

一斉管理のため、現段階では改善策はないが、現状や考えられる工夫を大学側に伝えていく。

8 図書館および図書・電子媒体等

★目的・目標

相談活動を行う際にマニュアル的に使用する書籍・文献については、必要なものを一通り整備しておく。とりわけ大学院生がセンターで相談や心理検査を担当する際には、不明なことをすぐにチェックできる体制を作っておくことが重要となる。

(図書、図書館の整備)

A群・図書, 学術雑誌, 視聴覚資料, その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
 A群・図書館施設の規模, 機器・備品の整備状況とその適切性, 有効性
 A群・学生閲覧室の座席数, 開館時間, 図書館ネットワークの整備等, 図書館利用者に対する利用上の配慮の状況とその有効性, 適切性
 A群・図書館の地域への開放の状況

★現状(評価)

A群・図書, 学術雑誌, 視聴覚資料, その他教育研究上必要な資料の体系的整備とその量的整備の適切性
 ・現状
 2005年度は, 心理検査に関する書籍, 認知行動療法に関する書籍を多く購入することができた。また, 実際に心理面接の中で相談者に見せながら利用できるようなCD-ROM等も整備し始めている。

・長所
 相談者の状態に応じた技法や検査を用いるために役立っている。また, 相談者自身が実際に資料やCD-ROMを使用することによって, 相談の効果が上がっている。

・問題点
 相談者の状態は多様であり, それに対応するため今後も多くの文献をそろえていく必要がある。

★改善方策

・問題点に対する改善方策
 さらなる相談者のニーズに応え, 多様な相談に対応できるよう, 常に新しい面接技法等を取り入れる視点を持つ必要がある。さらに, 相談者自身が実際に利用できるような書籍, CD-ROM等についても調査を進めていく。

(学術情報へのアクセス)

B群・学術情報の処理・提供システムの整備状況, 国内外の他大学との協力の状況

★現状(評価)

・現状
 毎年, センターの紀要(明治大学心理臨床センター心理臨床学研究)を発刊して他大学(国内)の機関に送り, また他大学の機関からも紀要を送付してもらう形の交流を行なっている。

・長所
 センター紀要には, 研修相談員である院生の事例研究論文も掲載される予定であり, 今後いっそう充実した内容となることが期待されている。

・問題点
 現在のシステムの範囲では, 特に問題はない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

9 社会貢献

(社会への貢献)

★目的・目標

広く地域を対象とした相談活動を行うことにより, 大学がもつ臨床心理学の知見を広く社会に還元する。

B群・社会との文化交流等を目的とした教育システムの充実度

B群・公開講座の開設状況とこれへの市民の参加の状況

B群・教育研究上の成果の市民への還元状況

C群・ボランティア等を教育システムに取り入れ地域社会への貢献を行っている大学・学部等における, そうした取り組みの有効性

C群・地方自治体等の政策形成への寄与の状況
C群・大学附属病院の地域医療機関としての貢献度

★現状(評価)

B群・教育研究上の成果の市民への還元状況

・現状

大学がもつ心理臨床の知見を社会に還元するため、広く地域に開かれた相談機関として開設されたが、東京はもとより関東近県から一般市民の相談者が訪れている。他の相談機関や精神科医療機関等からも多くの紹介を受けるようになってきている。

・長所

大学がもつ相談機関として、一般市民からの信頼が寄せられ、相談数が増加し、相談者が得た好印象によりさらに紹介の輪が広がったりした。また、相談者の数カ所の精神科医療機関から繰り返し紹介を受けるなど、地域の医療機関からの信頼も寄せられるようになってきている。

・問題点

現在、最終的な来談者目標数の60～70%を達成した段階であり、今後、相談数のさらなる増加を目指して、より広く広報活動を行い、地域の他機関との連携を行っていく必要がある。

C群・大学附属病院の地域医療機関としての貢献度

・現状

心理臨床センターは医療機関ではなく、大学附属の心理相談機関である。2006年度は約1800名の来談者に対して臨床心理学の立場からの専門的な相談活動を実施しており、地域社会に対する貢献を行っている。活動をスタートさせて3年目になり、充実したものになってきていると考えられる。

・長所

高い専門性を身につけたスタッフと優れた機能を持った施設・設備が備わっており、難しい問題を抱えた来談者に十分に対応ができる状況にある。

・問題点

今後、来談者が増えたときに、現在のスタッフでは対応できなくなる。また、グループ面接の需要があるが、現在の施設では対応できない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

B群・教育研究上の成果の市民への還元状況

地域他機関への積極的な働きかけを行い、実際の訪問等し合いながら連携をとっていく必要がある。また、センターの相談活動が十分に軌道に乗った段階で、継続的な公開講座などを企画することを今後の課題として検討する。それまでは、必要に応じて、単発的な企画を立ち上げる予定である。

C群・大学附属病院の地域医療機関としての貢献度

学内の理解を得、理事会に働きかけて、スタッフを増員する体制を整える。また、グループ用の施設は、当面はセンターに近接する会議室を借用することで対応する予定である。

12 財務

★目的・目標

相談・援助活動及び調査研究を円滑に行うための予算を確保する。

(教育研究と財政)

B群・教育研究目的・目標を具体的に実現する上で必要な財政基盤(もしくは配分予算)の確立状況

B群・総合将来計画(もしくは中・長期の教育研究計画)に対する中・長期的な財政計画の策定状況および両者の関連性

C群・教育・研究の十全な遂行と財源確保の両立を図るための制度・仕組みの整備状況
★現状(評価)
B群・総合将来計画(もしくは中・長期の教育研究計画)に対する中・長期的な財政計画の策定状況および両者の関連 <ul style="list-style-type: none"> ・現状 将来的な事業や研究の構想に向けて、「中・長期計画書」を作成して予算計画を策定している。 ・問題点 将来構想に向けては、相談数増加に対応できる部屋数の確保など、現状では実現が難しい課題がある。 C群・教育・研究の十全な遂行と財源確保の両立を図るための制度・仕組みの整備状況 <ul style="list-style-type: none"> ・現状 心理臨床センターでは相談者から相談料を徴収しており、相談者の増加から今後も一定の収入が見込まれる。 ・長所 教育・研究のための予算確保だけでなく、相談料によって財源を確保できる。 ・問題点 現段階では相談料の見直し等の必要はない。
★改善方策
<ul style="list-style-type: none"> ・問題点に対する改善方策 B群・総合将来計画(もしくは中・長期の教育研究計画)に対する中・長期的な財政計画の策定状況および両者の関連 将来構想についてより具体的な検討を続けていく。
(外部資金等)
B群・文部科学省科学研究費、外部資金(寄附金、受託研究費、共同研究費など)、資産運用益等の受け入れ状況
★現状(評価)
<ul style="list-style-type: none"> ・現状 現在は受け入れていない。 ・問題点 今後の活動に向けて、受け入れを計画していく。
★改善方策
<ul style="list-style-type: none"> ・問題点に対する改善方策 今後の活動に向けて、受け入れを計画していく
(予算の配分と執行)
B群・予算配分と執行のプロセスの明確性、透明性、適切性 C群・予算執行に伴う効果を分析・検証する仕組みの導入状況
★現状(評価)
B群・予算配分と執行のプロセスの明確性、透明性、適切性 <ul style="list-style-type: none"> ・現状 予算配分については文学部事務室庶務担当との協議、心理臨床センター内スタッフ会議での協議を行い、年度当初に配分を計画し、計画にそって執行している。 ・問題点 年度中に必要な予算が生じても、配分の変換が難しい。

★改善方策

- ・問題点に対する改善方策
年度末に予算計画の見直しを行い、次年度の計画に生かす。

13 事務組織

★目的・目標

心理臨床センターが、社会貢献の場・大学院の実習機関とし機能・発展するよう、教員と共に携わる。

(事務組織と教学組織との関係)

- A群・事務組織と教学組織との間の連携協力関係の確立状況
- B群・大学運営における、事務組織と教学組織の相対的独自性と有機的一体性を確保させる方途の適切性

★現状(評価)

B群・教学に関わる企画・立案・補佐機能を担う事務組織体制の適切性

・現状

心理臨床センターの事務は、文学部事務室が行うことになっており、庶務事項のひとつとして担当している。心理臨床センター専従の事務取扱いとしては、短期嘱託職員が1名、また、専任の相談員として採用された1名は、職員枠での採用であり、相談業務以外に事務取扱いについても携わっている。企画・立案については、センター長が中心となりとりまとめ、「年度計画書」は運営委員会で決定されるが、その際には事務として資料等作成及び運営委員会の補佐を行っている。

・長所

専任相談員1名は、職員の立場でもあり、運営委員会及び相談担当の打合せである担当者会議双方の出席が可能であり、センターの運営について十分に理解することができ、企画・立案に積極的に携わることができる。

・問題点

専任の事務職がないため、相談担当者が事務も兼ねる必要があり負担となる。短期嘱託職員が常時1名しかおらず、センターでは、重要な役割を担っているが、継続性がない点が危惧される。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

専任職員採用を求めたいが、大学の人事計画において予算上むずかしいようであるならば、もう1名の短期嘱託職員の増員でしのいでいきたい。

(事務組織の役割)

- B群・教学に関わる企画・立案・補佐機能を担う事務組織体制の適切性
- B群・学内の予算(案)編成・折衝過程における事務組織の役割とその適切性
- B群・学内の意思決定・伝達システムの中での事務組織の役割とその活動の適切性
- B群・国際交流、入試、就職等の専門業務への事務組織の関与の状況
- B群・大学運営を経営面から支えうるような事務局機能の確立状況

★現状(評価)

B群・学内の予算(案)編成・折衝過程における事務組織の役割とその適切性

・現状

「年度計画書」に基づき予算案を作成し、センター長に確認する。教務理事へのヒアリングについては、事務局も立会い補佐する。予算管理部門からの具体的なヒアリングについては事務局が対応する。

・長所

運営委員会において年度計画書作成をしっかりと行うことで、予算編成がしやすくなっている。

B群・学内の意思決定・伝達システムの中での事務組織の役割とその活動の適切性

・現状

センターの意思決定に必要な情報収集や資料作成を行い、運営委員会で適切な判断ができるよう準備する。審議結果については、それぞれの部署・組織に文書等を作成して報告する。

B群・大学運営を経営面から支えうるような事務局機能の確立状況

・現状

相談者から相談料金を徴収している。また、事務職として短期嘱託職員を配置することで、人件費抑制に寄与している。センターの予算執行にあたっては効率的運用をこころがけている。

・長所

相談料金については、毎年一定の収入が見込まれる。2006年度には消耗品費等の支出は、大幅な増加はない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

B群・教学に関わる企画・立案・補佐機能を担う事務組織体制の適切性

専任職員採用を求めたいが、大学の人事計画において予算上むずかしいようであるならば、もう1名の短期嘱託職員の増員でしのいでいきたい。

14 自己点検・評価

★目的・目標

自己点検・自己評価を行うための制度をつくり、点検・評価の内容を充実させるとともに、点検・評価したことを今後のセンターの活動に役立てるシステムを確立する。

(自己点検・評価)

A群・自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

C群・自己点検・評価プロセスに、学生・卒業生や雇用主などを含む学外者の意見を反映させる仕組みの導入状況

★現状(評価)

A群・自己点検・評価を恒常的に行うための制度システムの内容とその活動上の有効性

・現状

全学的な自己点検・評価のシステムに基づいて、多様な項目について自己点検・自己評価を行っている。2004年度までは、心理臨床センターは文学部の枠の中で行っていたが、2005年度からは独立に行うことになった。

・長所

心理臨床センター独自の問題があるので、全学的なシステムに基づきつつも、文学部の枠から独立して自己点検・自己評価を行うことは、意義もあり、また行いやすい。

・問題点

全学的システム自体が、大学の教育的な機能に焦点があてられた項目になっており、あまりにも普遍的・画一的な項目に対する回答を求め形を取っているため、広く社会を対象としたセンターの実態とずれた回答内容にならざるを得ない面がある。回答しようがなく、焦点がずれたり、当り障りのない内容になったり、センターの立場からは積極的に述べたいことがあっても、該当する項目がないといったことである。

C群・自己点検・評価プロセスに、学生・卒業生や雇用主などを含む学外者の意見を反映させる仕組みの導入状況

・現状

センターの場合、来談するクライアント、連携する外部機関(病院・クリニック・学校等)や研修相談員としての大学院生の意見を反映させるかどうかの問題となるが、センターの活動が始まったばかりであり、この問題に自己点検・評価の観点からアプローチすることはまだなされていない。ただし、大学院生の意見については、さまざまな機会に取り上げ、センターの活動に反映させているので、公式的な自己点検・評価のシステムに基づくものではないが、実質的には行われている。

・長所

重要な問題であり、うまく取り組んで意見を反映させることができると、センターの活動を活性化させることができる。大学院生の意見については、それを取り上げる機会が多くあり、実際に活かすことができる。

・問題点

クライアントの意見の反映は、心理面接あるいはクライアント—セラピスト間の治療的人間関係そのものに重大な影響を与えるきわめて微妙な問題を含むため、自己点検・評価の制度の観点から取り扱うべきではない。

★改善方策

・問題点に対する改善方策

回答を画一的に求めるやり方を改めるとか、個々の部署で必要な項目を独自に立てるといった、実態に即した点検・評価を行うための自由度を高めることが必要である。センターの担当者会議および運営委員会で、自己点検・評価の観点から大学院生および連携する外部機関の意見を取り上げるための制度を検討する。